

《研究ノート》

戦後の小牧実繁とその地政学観

柴田 陽一

1. はじめに

アジア・太平洋戦争期に、京都帝国大学文学部地理学講座第三代教授の小牧実繁（1898-1990年）は、新しい地理学として日本独自の地政学である「日本地政学」を主唱していた。1940年の『日本地政学宣言』をはじめとして地政学にかかわる数多くの本を出版したほか、雑誌・新聞・講演・ラジオなど各種メディアを通じて、国民の啓蒙を意図してのプロパガンダ活動を展開した。さらに、地理学教室のスタッフや卒業生を動員して、地政学研究グループである総合地理研究会を組織し、参謀本部の外郭団体からの資金援助を受けて陸軍の戦略研究の一端を担っていた。

以上のような小牧の活動の詳細は、拙著『帝国日本と地政学』[柴田 2016]において論じたが、そこで取り上げなかった問題の一つとして、本稿では、戦後の小牧が戦中の地政学に対してどのような考えを持っていたのかという点を検討したい。

拙著[柴田 2016 : 348-349]で述べたように、小牧は1980年の文章「戦前、戦中、戦後」の中で、その時点でも変わらぬ「日本地政学」に対する信念を表明した[小牧 1980 : 17]。しかし、それ以外は表立って地政学について語ることはなかったと考えられている。例えば、1985年に行われた日本人研究者によるインタビューでは、戦中の地政学について多くを語ることはなかった[竹内・正井 1986 : 42-74]。

では、なぜ 1980 年というタイミングで、小牧は「日本地政学」に対する信念を表明したのだろうか。本稿では、彼が戦後行った研究を概観すると共に、この問題の背景を探ることを通じて、戦後の小牧の地政学観を明らかにしてみたい。

2. 公職追放と大学復帰

終戦後まもない 1945 年 12 月 27 日に、小牧は京都帝国大学を辞職した。その後、彼は大学の正門にほど近い左京区吉田上大路町で古本屋の経営を始めたとされる [Takeuchi1994 : 202 ; 浅井編 1992 : 126]。「小牧実繁先生年譜」には、その後 1947 年 11 月 30 日に「中央公職適否審査委員会に於て追放仮指定を受く」とある [小牧実繁先生古稀記念事業委員会 1968 : 515]。同日付の『官報』を確認すると、戦中に大日本言論報国会の理事であったことが仮指定の理由であったことが分かる。

1985 年 8 月 12 日に京大会館で竹内啓一 (1932-2005 年) によるインタビューを受けた小牧は、戦後の状況を聞かれ、「食う道は一つもなくなったもんで、蔵書を売ったからね」と答えている [竹内・正井 1986 : 69]。このインタビューは、シニア地理学者のインタビュー集である『地理学を学ぶ』に「歴史的風土で培われた地理学—小牧実繁・織田武雄先生に聞く—」 [竹内・正井 1986 : 42-74] と題して掲載されたことから分かるように、小牧と織田 (1907-2006 年) の二人を対象としたものであった。地図史研究で多くの業績を残した織田は、小牧が辞職した後に地理学講座の第四代教授に就任した人物である。

このインタビューで小牧は、戦中の地政学にかかわることについては、蔵書を売ったこと以外、彼が当時のスタッフや大学院生に世界の各地域を分担して研究させたことにより、後に分担した地域の専門家になった者——東南アジア研究の別技篤彦 (1908-1997 年) やソ連・ロシア研究の三上正利 (1914-1989 年) ら——がいたことしか話していない [竹内・正井 1986 : 65, 69]。それは、竹内 [1986 : 12] が「今回の小牧実繁、織田武雄へのインタビューでは、当初の申し合わせにより、地政学への言及はなされなかった」と述べるように、地政学については言及しないという取り決めがインタビューをする側と受ける側で事前になされていたからである。

小牧や織田にとって、あるいは京都大学の地理学教室にとって、戦中の地政学研究への従事とそれに起因する戦後の混乱や公職追放の件は、戦後 40 年経った時点においても、なお大っぴらに語ることが憚られるものであったと推察される。また、筆者が調べた限り、小牧は日本人からの地政学に関するインタビューには、死ぬまで答えることがなかった。

ところで、京都帝国大学辞職後の小牧の仕事であるが、しばらくは古本屋「ふみや」の経営をしていたが、1949 年 1 月より三明社に勤めることになった (1950 年 11 月末まで) [柴田 2005 : 43]。この件については、小牧の下で戦中に地政学を研究していた村上次男

(1911-2002年)が、「大阪の三明社という出版社の編集部と一緒に勤めんか」と小牧から誘いがあり、二つ返事で引き受けたと回想している〔村上1993:63-64〕。同社から1949年7月に室賀信夫(1907-1982年)の『アメリカ国土論』、1950年6月に人文地理学会編『地理辞典』と、立て続けに地理学関係の書籍が上梓されたのは、小牧の人脈のなせる業と見てよいだろう。室賀は戦中に京都帝国大学文学部助教授を務めた人物で、村上と同じく小牧の下で地政学研究に従事していた。人文地理学会は織田をはじめとする戦後の京都大学文学部地理学教室が中心となって、1948年3月に立ち上げた学会である。

さて、小牧はその後、1950年12月から京阪電気鉄道株式会社嘱託として「沿線観光地調査」を担当していたが〔柴田2005:43〕、1951年8月6日について「公職追放仮指定」が解除された。当時経済学部で勤めていた教え子の和田俊二(1913-1989年)の誘いもあり、小牧は出身地である滋賀県の滋賀大学学芸学部で、1952年7月に教授として迎えられ、学長職も1959年から1965年まで2期にわたって務めた。また、京都女子大学や福井大学に非常勤講師として出講したこともあった〔小牧実繁先生古稀記念事業委員会1968:515-516〕。ちなみに小牧は福井大学では「歴史地理学」を講じていたようである〔無署名1959:87〕。滋賀大学では、実習や演習のほか、「地理学史」や「人文地理学概説(概論)」の講義を担当していた〔無署名1954:75;同1955:73-74;同1959:88〕。

3. 小牧が戦後行った研究

戦後、小牧が行った研究の多くは、滋賀県周辺のローカルな歴史地理学・民俗学的研究であった。それらは、たいていの場合、『滋賀大学学芸学部紀要』に発表された。学芸学部はいうまでもなく、現在の教育学部であり、大津市の南部の瀬田川右岸、石山寺の南にそのキャンパスがある。これらの滋賀県周辺の研究は、同僚と共に行った調査をもとに、共著で発表されたものが多い。1950年代前半から1960年代前半にかけて、小牧は毎年、近江盆地の周縁に位置する山村の調査を行っていた〔小牧1951;同1953;1954;同1955;同1956a;同1956b;同1957;小牧・川合1960;小牧・川合・宮畑1958;小牧・川合・宮畑・小林1956;小牧・宮畑1957;同1962〕。

年譜などによれば、小牧は1963年に設立された滋賀民俗学会(月刊誌『民俗文化』を発行)の会長を1963年から1979年まで務めるなど民俗学方面で活躍し、1984年には滋賀県文化賞を受賞しており、また、1958年に創設された日本歴史地理学研究会(1966年に歴史地理学会に改称)の顧問を務めたことなどが判明している〔小牧実繁先生古稀記念事業委員会1968:511-517;竹内・正井編1986:70〕。したがって、戦後の小牧の学問的貢献はわずかであったとの竹内の評価〔Takeuchi2001:88〕は検討の余地を残すが、小牧が学界の第一線に立つようなことはなく、戦中の地政学のように多方面に影響を及ぼす

研究をしていなかったことは確かである。

このように、滋賀県周辺のローカルな歴史地理学・民俗学的研究をしていた小牧が滋賀大学を退官したのは1965年のことであった。古稀を迎えた1968年には、織田を中心に小牧の門下生などが集い、『人文地理学の諸問題—小牧実繁先生古稀記念論文集—』[小牧実繁先生古稀記念事業委員会1968]が刊行された。同論文集には40名に上る研究者の論文が収められている。

その後、1976年に刊行された『日本民俗誌大系』第10巻には小牧の「久米島民俗断片」、第11巻には同じく「近江野洲郡の民俗」が収録されているが[小牧1976a; 同1976b]、これらの論考はいずれも1931年に執筆したもので、もともとはそれぞれ雑誌『民俗学』、『郷土研究』に掲載されたものであった。両巻末に添えられた「著者略歴」によると、小牧は「大正十一年〔1922年—筆者注、以下同様〕の大学卒業の頃より柳田国男〔1875-1962年〕の知遇を得、民俗学に興味を持つようになり、専門の地理の調査が同時に民俗の採訪となることも多かった」。小牧が最初のころ先史地理学研究に携わっていたのは、濱田耕作（1881-1937年）から受けた大きな影響によるものであることはよく知られているが、一方で彼は民俗学にも造詣が深かったのである。この点については小牧自身も次のように述べている。

私は京都大学を出て間も無くの青年時代から柳田国男先生に心酔する変り者の一人で、「郷土研究」や「民俗」などにも時々投稿させて頂いたり、色々御話を伺ったりして居たので、そんな関係から、私は早くから沢田先生³⁾を存じ上げ沢田先生も又私を知って頂いて、御著作なども度々御恵贈に預かり、先生の著作は柳田先生のものと共に早くから私の愛読書の一つとなっていた。[小牧1975: 巻頭]

1984年には、小牧が民俗学関係の業績により昭和59年度滋賀県文化賞を受賞することになり、滋賀民俗学会がそれを祝って、『近江国見聞録—伝承を訪ねて五十年—』[小牧1984]を出版した。その本には1931年から1955年の間に彼が執筆した民俗学的論考が8本収められている。

以上、小牧が戦後行った研究を概観してきたが、この概観からは、彼が戦中の地政学に対してどのような考えを持っていたのかを読み取るすべは見出せない。

4. 1980年の「戦前、戦中、戦後」

さて、実は、戦後の小牧が戦中の地政学に対してどのような考えを持っていたのかに関して、非常に注目すべき文章があるのである。それは1980年7月に滋賀県文化体育振興

事業団発行の『湖国と文化』に、特集「わが終戦—35年目の夏に—」の一編として掲載された「戦前、戦中、戦後」[小牧 1980] という見開き 2 ページの文章である。

久武哲也 (1947-2007 年) からの私信 (2003 年 8 月 8 日付) によると、1998 年 11 月 26 日に甲南大学で行われた村上次男へのインタビュー [小林・鳴海・波江編 2010 : 143-170] の際、村上是小牧からもらったこの文章のコピーを参加者 (久武・水内俊雄・荒山正彦・大城直樹・他 2 名) に配付した。ただし、掲載誌の情報を村上也知らなかったため、久武は小牧が卒業した第三高等学校の同窓会誌に載ったものではないかとの推測を筆者に示していた。出典は後に、小牧自筆の著作目録「小牧実繁著書講演論文目録」により判明した [柴田 2005]。

この 1980 年の文章からいくつか興味深い箇所を引用してみたい。まず、小牧が 1927 年から 1929 年に至る 3 年間の欧米留学の経験を回想した部分である。

滞在地英国の首都ロンドンで見せられた英国全国民に漲る強い愛国心に魅せられていた私は昭和四年 [1929 年] 帰国を前に強度の愛国心に捕えられていた。[小牧 1980 : 16]

この一節から読み取れるのは、彼が日本地政学を唱導するに至った大きな動機の一つに、彼の強い愛国心があったことである。そもそも、彼は文部省から地理学研究のため 3 年間のドイツ留学を命じられていたのだが、1927 年 7 月に日本を旅立った後、アメリカとイギリスを経て、フランスのパリに入り、旅行やイギリスで開催された国際地理学会議 (International Geographical Congress) への出席以外は、1929 年の帰国まで同地に滞在した。パリ大学では、ドゥマンジョン (Albert Demangeon, 1872-1940 年)、マルトンヌ (Emmanuel de Martonne, 1873-1955 年)、ガロア (Lucien Gallois, 1857-1941 年)、ショレー (André Cholley, 1886-1968 年) らから教えを受けている [竹内・正井編 1986 : 50-53 ; 小牧 1935 ; 同 1936a ; 同 1936b ; 同 1936c]。

小牧はこの留学の報告ともいえる「巴里学事暦」を 1935 年から 1936 年にかけて 4 回に分けて発表しているが、その中で彼が当時行っていた先史地理学研究との関連から留学中に通っていた「土俗学研究所 (Institut d'Ethnologie)」について、「かなりゆつたりした気分が漂って居る」、「この学問 [土俗学] が世間離れのした学問であるからかも知れないが、土俗学研究室の空気は地理学研究室のそれよりもびつたりと自分には合ふ様に思へる」 [小牧 1935 : 208] と書いている。数年後に「日本地政学」を主唱し、戦中は各種メディアを通じてプロパガンダ活動を展開することになることを考えると、この記述は非常に興味深いものと言えよう。

次に、戦中の地政学にかかわる部分を引用しよう。

京都帝国大学文学部の教授として必要な学位論文の作成に努め、昭和十一年〔1936年〕末、その作成提出を終ると、東洋伝統の思想「地は政の本なり」の根本原理に従い「日本地政学」の研究に留意することとなり、昭和十五年〔1940年〕十月十七日「日本地政学宣言」の発表ということになったのである。心ある研究者、また一般読書人からも、従来の地理学とは若干趣を異にし、その志向するところが多少とも動的であることにより意外と清心の気に富んだものとして迎えられ、要路の人達のうちにも隠れた読者が数を増やしつつあるらしくなった。〔中略〕私は〔1941年〕十二月八日の、対米英開戦の詔勅を京都帝国大学西側の一飯店に於いて研究室の人等と共に拝聴、思わず男振いをして号泣したことを覚えている。〔小牧 1980 : 16-17〕

このように回想する小牧の「日本地政学」の実態がどのようなものだったのかについては、拙著〔柴田 2016〕を参照していただきたい。

続いて、戦後について記された部分を引用しよう。

私はこの日〔1945年8月15日〕終戦の大詔を京都帝国大学文学部陳列館地下室のラジオによって拝聴したが、そこには終に滂沱として下る涙はなかった。涙も出ない悲痛だけがあった。私はその日どうして家に帰ったのかの記憶もない。そしてその日から長い戦後が始まるのであった。／アメリカの進駐軍が何時日本に上陸して来たのか私は覚えがない。しかしそれから間もなく進駐軍は京都にもやって来た。そして京都帝国大学にもやって来た。来たなど思った。大学事務局からの連絡によって私は文学部地理学研究室の教授室で待機した。進駐軍首脳の将校の一人だけ私の室に入って来た。〔中略〕「俸給はいくら取っていたか」「地図を作ったか」「地政学をやった教授は日本に何人居たか」等々質問は簡単であったが、「日本地政学」をやった日本の地理学者は大学の教授としては私一人であったと答えたら、彼は「日本はそれで敗れたんです。アメリカでは各大学に、あなたのような地政学をやる教授が何人も居て皆で協力したのです」といったことまで話して呉れて、それでアメリカ進駐軍の京都帝国大学地理学教室への進駐は終りを告げたのである。〔小牧 1980 : 17〕

この一節が教えてくれるのは、戦中のアメリカでは地政学研究が相当に行われており、日本の地政学研究についての情報をつかんでいたということである。実際、アメリカの 1942-

1943年の雑誌記事や1944年の地政学の概説書の中に、小牧の名前が“Sunekichi Komaki”と誤った形ではあるが、登場していたことを確認できる [Menefee1942; 同 1943; Fifield and Percy1944]。

進駐軍が地理学教室を訪れた件については、村上が1999年5月8日のインタビューで語ったことも参照する必要があるだろう。村上によると、京都帝国大学にGHQが来たのは1945年10月のことあり、GHQは小牧に対して戦中に行っていた軍事的な研究成果を「もう一遍つくれ」「reproduce」と命令した。しかし、小牧は「もう資料はない」と応じたようである。肝心の軍事的・地政学的な資料は、村上によると、戦争が終わってもまもなく、小牧の命令で全部焼き捨てたとのことである。戦中に小牧たちが地政学の研究会を開いたり、関連資料を保管するために借り上げていた吉田上大路町の民家である「吉田の家」の蔵書も、すべて古本屋に売ったという [正井・竹内編 1999 : 63]。

文章の続きで小牧は、戦争が終わると友人や教え子、さらには家族が死に、助教授以下もすべて職を辞したので地理学教室は空っぽになるなど、「色々悲惨なことが起るし、爾来三十五年の永きに亘って思わぬことが重なりやってきた。」 [小牧 1980 : 17] と述べている。彼にとっての「長い戦後」であった。彼の苦勞がひしひしと伝わってくると同時に、彼の暗く重苦しい戦後観がうかがうことのできる記述である。

ここまでは、小牧の被害者意識ばかりが目につくのであるが、「しかし結局正しいことは何時かは認められることになるのではないか」で始まる最終段落に、十分注意を払うべきであると筆者は考える。最後にその箇所を引用しておこう。

しかし結局正しいことは何時かは認められることになるのではないか。最近、当のアメリカでも心ある学者たちの間で、日本地政学、殊に小牧を中心とした日本の地政学の中にもっともな点があるのではないかという考えが生れて来て、それが学位論文のテーマに選ばれ、その論文が審査にパスしたということを知ったが、続いて、その人が或る著名大学の教授として赴任したという確報をも最近手にした。学位論文に、歪めた説を述べることなどある筈はないのであるから、これは誠に朗らかな嬉しいニュースで私も戦後三十五年死なずに生き永らえて来たのであるから、何とかして、今後も中外に施して悖らない日本地政学の確立に精進したいものと思っている。 [小牧 1980 : 17]

1980年当時の小牧の「日本地政学」再興の宣言と言ってもいいだろう。

ところが、ここで疑問が湧いてくる。果たして小牧は戦後ずっと「日本地政学」を確立すべしとの信念を抱き続けてきたのだろうか。戦中に地政学研究を行ったせいでこれまで

苦勞をしたという過去への否定的な思いから、アメリカの誰かからの情報により一時的に解放されたために、思わず口を衝いて出た程度の言葉かもしれないからである。

したがって以下では、小牧が誰からどのような情報を得たのかなど、1980年ごろ小牧の周りに起こった出来事について検討し、本章で紹介した1980年の文章の意味を再び考え直してみたい。

5. 1979年のステファンによるインタビュー

1980年の文章で小牧が言及した学位論文とその著者は、久武の論文に明記されている〔久竹1999：196-197〕。すなわち、1975年にワシントン州シアトル市にあるワシントン大学（University of Washington）に提出された“Chiseigaku”：Japanese Geopolitics〔Horiuchi1975〕で、著者はホリウチ（Russell Nozomi Horiuchi, 1923-2011年）²⁾である。

この学位論文に関する情報を、小牧は1979年にハワイ大学の日本史教授のステファン（John J. Stephan, 1941年-）³⁾から入手したと考えられる。なぜなら、村上のハワイに関する論文「ハワイの姿」〔村上1943〕に注目したステファンが1979年に来日し、村上加えて小牧にもインタビューを行っているからである〔久武1999：196-197〕。

1984年のステファンの著書 *Hawaii Under the Rising Sun*（昇陽のもとでのハワイ）⁴⁾によると、村上・久武・ステファンの三人が神戸の甲南大学で会って話したのは1979年8月17日であり、ステファンが村上と共に京都に赴いて小牧に「日本地政学」に関するインタビューを行ったのは、その翌日1979年8月18日であったという〔Stephan1984：179-206〕。久武は、ステファンの著書に「〔小牧の〕古稀記念論文集の著作目録に収載されていない〔戦中の地政学に関する〕数多くの雑誌論文が引かれている」ことから、インタビュー時に「小牧がステファンに示唆したものであろう」と推測している〔久武1999：196〕。

8月18日に平安神宮前の料亭で小牧へのインタビューが実現するまでに、ステファンと村上、さらに小牧との間で手紙や電話などのやり取りがあったようだ。筆者が久武から聞いた話によると、少なくとも村上とステファンは、久武が村上の後任として甲南大学文学部に勤め始めた1977年ごろから、やり取りを始めていたとのことである。

この点は、村上と同じく小牧の下で地政学研究に従事した浅井得一（1913-2003年）が1978年10月に紹介した小牧の葉書の存在からも裏付けられる。というのは、浅井は1978年5月と6月に「バーモ暗殺未遂事件についての証言」という論文を発表した〔浅井1978a；同1978b〕。その内容は戦中の地政学研究と共に、陸軍司政官としてビルマに渡った後、自らが起こした事件について述べたものであった。その抜刷を小牧に送ったところ、

「アメリカの一部で **Eight Corners One House** [八紘一字] と言っているのが寧ろ面白いと思います。」ということが書かれた葉書が返ってきたというのである [浅井 1978c : 19-20]。

浅井が書き添えた「やや意味不明の点」というのは、この一節を指すものと思われるが [浅井 1978c : 20]、むしろこの一節は 1978 年 10 月時点で、小牧が少なくとも村上を通じてステファンというアメリカ人の研究者や、アメリカにおける「日本地政学」の評価などを耳にしていたことを示すものだと考えられる。

そもそも 1979 年 8 月 18 日のインタビューは、村上へのインタビューの翌日のことであるから、ステファンが事前に何らかの方法で約束を取り付けていたことはまず間違いないと言えるだろう。そして、久武が推測するように、小牧がステファンに対して戦中の雑誌論文について示唆したのならば、小牧はステファンのインタビューを受けるに際し、何らか準備をしていたのではないかと考えられるのである。

6. 「小牧文庫」の調査からみる 1979 年

この点を考えるのにきわめて興味深い資料が、戦後の小牧の勤務先であった滋賀大学の附属図書館教育学部分館に所蔵されている。

2003 年 6 月 21 日に開催された人文地理学会第 74 回地理思想研究部会において、岡田俊裕は「近現代日本地理学史の構想—『地理学史 人物と論争』の概要—」と題した研究発表の中で地政学に言及し、おおむね次のようなことを述べた。

かつて教育学部分館を訪れたところ、小牧の蔵書が保管されており、しかも彼の地政学に関する著書の見返りに「〇〇年再読」という文字が確認できた。この点から推測するに、彼は地政学に一貫した信念を持っており、戦後も自著を読み返していたのだろう、と。

席上、筆者はこの点について、「小牧が自著を読んだのは具体的に何年のことなのか」という質問を行った。岡田の答えは、「覚えていない」であった。また、同じ自著を何度も読み返しているのか否かという点も、岡田の答えでははっきりと分からなかった。しかしながら、筆者は小牧が地政学に関する自著を読み返したのがいつのことであるかが、最も重要な点であると考えていた。そこで、岡田の研究発表から約半年後の 2003 年 12 月 19 日、ようやく思い立ち、大津市にある教育学部分館に実物を確かめに行った。

教育学部分館は、1 階と 2 階に開架図書が置かれ、書庫は 4 階建てであり、地理学関係の図書がかなりそろっていた。「小牧文庫」という言葉から想像される状況とは異なり、小牧の蔵書は別置されるのではなく、〇（まる）の中に縦に小牧と記されたシールが貼られているだけで、一般の図書と同様に配架されていた。しかし、幸いにもそのシールは目立つオレンジ色で、他の図書との識別は容易であった。

小牧の蔵書の大半は書庫の中に置かれていた。蔵書の見返しには「小牧清子寄贈」の印が押してあり、「小牧文庫 41-4」のように文庫のナンバーも記されていた。小牧清子とは小牧実繁の妻である。「小牧文庫」とは、1990年2月に小牧が亡くなった後、1991年6月に妻が寄贈した蔵書なのである。

さて、筆者が調査を行った「小牧文庫」所蔵の地政学関係の自著は表1の11冊である。教育学部分館には、『日本地政学宣言』（訂正増補版、⑤と同じもの）をもう一冊所蔵しているが、その見返しには「滋賀師範学校図書」の印が押されている。つまり、同書は「小牧文庫」の一冊として登録されているわけではなく、「小牧文庫」の地政学関係の図書がすべて312.9||KO58という番号が付されていたのに対し、310||K3||1という別の番号が付されていた。

表1に示したように、小牧は自著に実に多くの書き込みをしている。以下、それを紹介していこう。第一に、見返しの部分からは、「小牧文庫」所蔵の自著の多く（⑤⑦⑧⑨⑩）が三橋時雄（1911-1996年）に贈ったものであることが分かる（図1）。後述するように、この点は非常に重要である。戦後、京都大学農学部教授を務めた三橋時雄は、姓は違うが小牧の末弟であり、画家の三橋節子（1939-1975年）の父に当たる人物である。

第二に、1942年9月20日発行の⑥『日本地政学宣言』（訂正増補版の再版）の見返しには、表1では省略したが、実は図2のように5つの年月日と数字が記されている。年月日は『日本地政学宣言』各版（①②③⑤⑥、1940年10月発行の初版は「小牧文庫」には所蔵されていない）の発行年月日と一致し、「昭和十七年〔1942年〕九月二十日」の下にある「一五〇〇」という数字は、⑥の奥付に記された発行部数「一五〇〇部」と一致する。したがって、この書き込みは小牧の最も有名な著書である『日本地政学宣言』各版の発行部数を示すものだと考えられる。同書は弘文堂書房から三版まで、訂正増補されたものが白揚社から再版まで、計5つの版が発行された。

第三に、裏表紙の見返しへの書き込み（図3・4・5・6・7）であるが、筆者はこれを最も重視している。なぜなら、1979年5月から8月にかけて、小牧が自身の地政学関係の著書5冊を読み返していた事実が浮かび上がるからである。小牧は、「私は読み度い本は、表紙から奥附まで全部を読み、最後に「何年何月何日一読了 小牧実繁」と署名する習慣を有っている」〔小牧1975：巻頭〕と自身で述べている。署名の日付を見れば、5月28日に①『日本地政学宣言』（再版）、7月16日に⑨『続日本地政学宣言』（初版）、7月25日に⑩『日本地政学覚書』、8月5日に⑦『日本地政学』、8月7日に⑤『日本地政学宣言』（訂正増補版）という順で小牧が読み返したことが分かる。

表1 「小牧文庫」所蔵の地政学関係の自著

No.	発行年月日	タイトル	出版社	版	定価	見返しへの書き込み	裏表紙の見返しへの書き込み	備考
①	1941年2月11日	日本地政学宣言	弘文堂書房	再版	1円50銭	なし	昭和54年5月28日再読了 実繁	
②	同上	同上	同上	同上	同上	なし	なし	タイトルページに「謹 皇中村直勝教授殿 著 者」「昭和54年10月12 日第3回びわ湖古本ま つり古書籍書画大即売 会会場西武百貨店大津 店にて求之 著者より 著者に帰也 10月13日 小牧実繁識」とある
③	1941年12月1日	同上	同上	三版	同上	なし	昭和19年4月15日京都市三条寺 町上ル古書肆に於て発見購入する ものなり 小牧実繁	
④	1942年3月30日	東亜の地政学	日黒書店	初版	50銭	なし	なし	東洋文化叢書
⑤	1942年5月25日	日本地政学宣 言 増補訂正 版	白揚社	増補訂正版	2円	謹呈三橋時雄殿 著者	昭和54年8月7日再読了 実繁	
⑥	1942年9月20日	同上	同上	増補訂正版 の再版	同上	訂正用 171頁誤植あり 昭和17年9月19日 小 牧実繁	なし	
⑦	1942年10月8日	日本地政学	大日本雄弁 会講談社	初版	同上	謹呈三橋時雄殿 昭和17 年11月19日著者	昭和54年8月5日再読了 実繁	
⑧	1942年12月10日	地政学上より 見たる大東亜	日本放送出 版協会	初版	50銭	謹呈三橋時雄殿 昭和18 年3月1日著者	なし	ラジオ新書96
⑨	1942年11月25日	続日本地政学 宣言	白揚社	初版	2円	謹呈三橋時雄殿 昭和18 年1月4日著者	昭和54年7月16日再読了 実繁	
⑩	1943年9月20日	同上	同上	再版	同上	なし	なし	
⑪	1944年9月5日	日本地政学覚 書	秋田屋	初版	3円20銭	謹呈三橋時雄殿 昭和19 年12月8日著者	昭和54年7月25日再読了 実繁	

謹呈三橋時雄殿
昭和十七年十月十九日
著者

図1 ⑦『日本地政学』（初版）への書き込み（番号は表1と対応，以下同様）

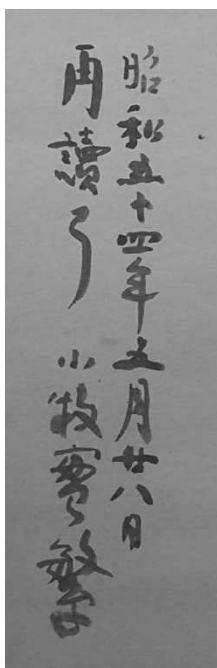
訂正用
一七一頁誤植あり
昭和十七年九月十九日
小牧安貝敏示

昭和十五年十月十七日
昭和十六年二月十一日
昭和十六年二月一日
昭和十七年五月廿五日
昭和十七年九月二十日

一五〇〇
一五〇〇
一五〇〇
一五〇〇
一五〇〇

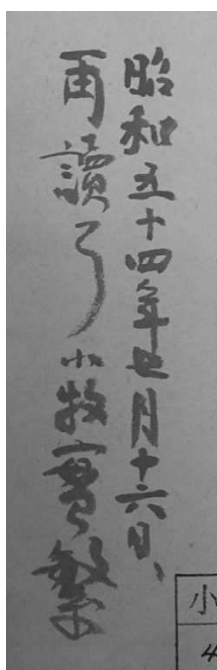
小牧清子 寄贈

図2 ⑥『日本地政学宣言』（増補訂正版の再版）への書き込み



昭和五十四年五月廿六日
再讀了 小牧実繁

図3 ①『日本地政学宣言』（再版）への書き込み



昭和五十四年五月廿六日
再讀了 小牧実繁

小
4

図4 ⑨『続日本地政学宣言』（初版）への書き込み

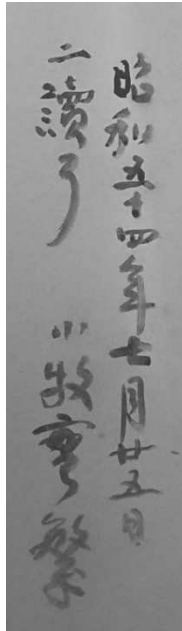


図5 ⑪『日本地政学覚書』（初版）への書き込み

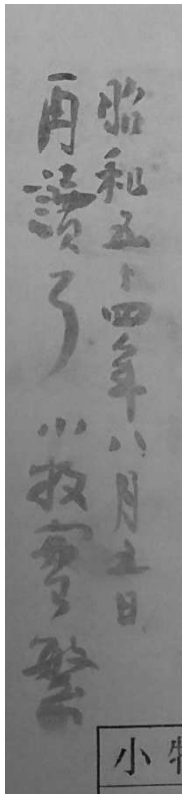
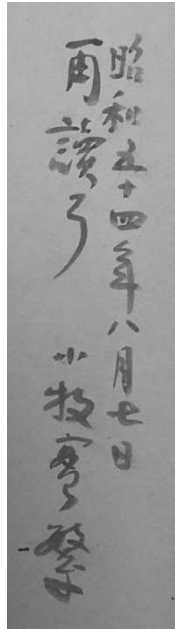
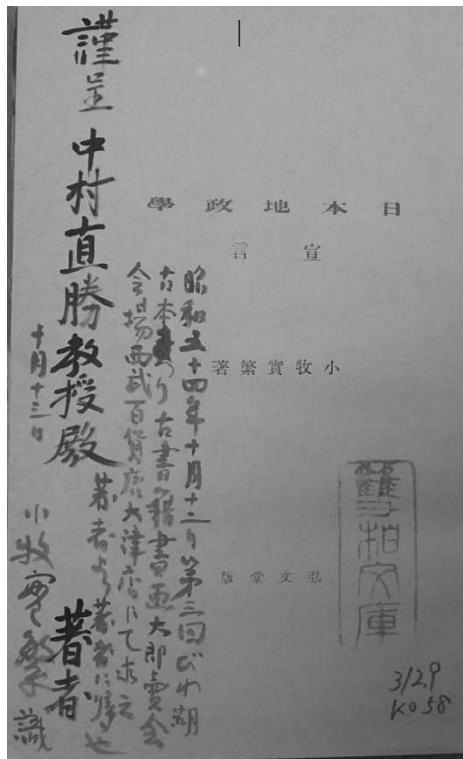


図6 ⑦『日本地政学』（初版）への書き込み



昭和二十四年八月七日
小牧実繁

図7 ⑤『日本地政学宣言』（増補訂正版）への書き込み



謹呈
中村直勝教授殿
十月十三日
小牧実繁識

日本地政学宣言
宣
著 小牧実繁

昭和二十四年十月十二日第三回ばかり
方本賣りた書之籍書言大即賣会
今場物西武百貨店大津店にて
著者より著者に贈也

弘文堂版

3/29
K058

図8 ②『日本地政学宣言』（再版）への書き込み

のた式文章よりのでも式つちよもしからハ

世界の根幹日本……………	二五
世界新秩序の構想と大學の使命……………	二六
日本地政學と太平洋戰……………	二七
探檢と地政學……………	二八
アジアの強み……………	二九
すめらみくに日本……………	三〇
濠洲の地政學……………	三一
大東亞の地政學……………	三二
すめらみくに……………	三三
地政學上より見たる大東亞共榮圈……………	三四
英國は滅亡す……………	三五
濠洲の開拓……………	三六
北太平洋の地政學……………	三七

図9 ⑨『続日本地政学宣言』(初版)への書き込み

本位の密細亞的結合を意圖した所から透られたものであるが、太平洋が既にその巨大な海洋領域からする分割的機能の喪失したことを物語るもので、密細亞の問題も太平洋的關聯を無視しては妥當の解決の出来ないことを知らねばならぬ。而も經度百八十度線をもつてする日附變更線の設定は太平洋の分割機能を餘りにも強く亞細亞人に感じさせて來た。この線をよく點檢すれば決して純粹な天文學的意味からなされたものでないことを知るのである。此處にアングロサクソンの太平洋的謀略を考へて見る必要がある。太平洋は據めて考へねばならない。一體としての太平洋を考へねばならないのである。

第二章 滿洲國と蒙疆

滿洲國の生誕が日本と一體をなして強い協同の防衛形態をなすことにあると云ふことは屢と語られて來た。即ち地政學の云ふ強國の圓形態への凝集運動の法則性に從つたものであるとも云へる。滿洲國との結合により日本はその形態の上に著しい厚味を加へた。勿論完全に近い圓形態へは未だシベリヤ方面に大きい缺陷があるけれども少くも強國が往々と

(196)

図10 岩田孝三『地政学』への書き込み

なぜ小牧がこの順序で読み返したのかは知る由もないが、上述のように、小牧がステファンと面会したのが 8 月 18 日であったから、小牧はインタビューに備えて自著を読み返していたと見てよいであろう。久武が推測するように、インタビュー時に小牧がステファンに対して戦中の雑誌論文について示唆したのも、この延長線上で理解できるように思われる。

第四に、備考欄に記したように、小牧は②『日本地政学宣言』（再版）を 1979 年 10 月 12 日に古本市で購入している。この日付はステファンのインタビューの後である。また、同書はもともと歴史学者である中村直勝（1890-1976 年）に贈ったものであった（図 8）。上述した三橋に贈ったものと併せて整理すると、表 1 の中で小牧が戦中からずっと所蔵し続けていた可能性があるものは、5 冊（①③④⑥⑩）に過ぎないのである。また、インタビューに向けて読み返した 5 冊（①⑤⑦⑨⑪）の自著のうち、戦中から所蔵していた可能性があるのは 1 冊（①）だけである。小牧が①を最も早い 5 月 28 日に読み終えた理由は、ここにあるのかもしれない。残りの 4 冊は、1979 年の 7 月に入ってから読み返したものであり、最初の 1 冊と残りの 4 冊の間にブランクがある。このブランクは、小牧が 1979 年 5 月末に最初の自著を読み終えた後、他のものを弟である三橋から譲ってもらうなどして入手したことを示しているように思われる。

第五に、小牧が 1979 年に読み返した 5 冊の自著には、本文中に赤鉛筆で多くの書き込みがなされている。例えば、文章の途中に点を打ったり、誤字脱字を補ったり、文章の一部を削ったりとさまざまである。読み返した 5 冊の目次にはいずれも、項目の上に赤鉛筆でチェックが入れられていた。⑨『続日本地政学宣言』（初版）への「のだ式の文章よりのである式の方よろしかるべし」という書き込み（図 9）は、小牧が文体にまで注意を払いつつ、自著を入念に読み返していたことを示すものであろう。

最後に、今回は「小牧文庫」の全体を調査したわけではないが、ほかにも小牧の地政学に対する考えを知ることのできる書き込みが見つかった。それは、小牧の地政学関係の自著と同じ棚に並べられていた、1942 年 2 月 5 日発行の岩田孝三（1907-1994 年）の『地政学』[岩田 1942] への書き込みである。同書の見返しには、岩田の文字で「謹呈 小牧先生 著者」と記されている。それに対し、裏表紙の見返しには「昭和十七年三月四日 小牧実繁」、同書最終頁である 225 頁には「昭和十七年七月廿一日讃岐より土佐への列車中にて読み了る 小牧実繁」とある。したがって、岩田から贈られた同書を小牧はしばらく経ってから読み終えたことが分かる。

本文中にも小牧は実に多くの書き込みをしており、例えば、同書の第一編「地政学の本質」の第五章「日本地政学の建設」に小牧について言及した箇所があるが、その書き込みの線は赤鉛筆で囲まれていた。また、195 頁では、6-7 行目の「太平洋は纏めて考へねばな

らない。一体としての太平洋を考へねばならない」のうち、「一体としての太平洋を」という箇所には傍線を引き、そこから頁の右端まで矢印を伸ばし、「小牧日本地政学の影響を見るべし」と書き込んでいる（図 10）。一方で、「くだらぬ議論多し」などと、岩田の地政学に対する考えを批判するような文言も多い。

以上、「小牧文庫」の調査から、次のようなことが判明した。すなわち、小牧はステファンと面会する 1979 年 8 月 18 日の前に、戦中の地政学関係の自著を読み返していた。しかも、その読み方は決して流し読みといった程度ものではなかった。小牧はステファンのインタビューに臨むに当たって、相当に入念な準備をしていたことのである。ただし、その読み返した自著の大半が、少なくともいったんは彼の手から離れていたことも指摘しておかねばなるまい。

7. ステファンの著書からみる 1979 年

では、ステファンによるインタビューの際、小牧は戦中の雑誌論文について示唆したのだろうか。また、小牧はステファンにどのようなことを語ったのだろうか。ステファンの著書からそれらの点を考えてみたい。

上述のように、ステファンの著書のタイトルは *Hawaii Under The Rising Sun* である。そのため、同書には村上の論文「ハワイの姿」[村上 1943] からの引用が多いことは言うまでもない。戦後の村上は「ハワイの姿」を発表したという理由で、戦中に非常勤講師を務めていた龍谷大学から教職追放の処分を受けた。1991 年に彼は次のように回想している。

私にいわせれば、別に真実を曲げているわけではなし、米国によるハワイ侵略の歴史を述べたにすぎない。後にハワイ大学の歴史の教授ステファン氏がわざわざ神戸まで訪ねてくれて、「アメリカ人でも知らないことをよく調べたな」と言っていたが、「だからといって、日本による攻撃を当然としているのはおかしい」と、痛い釘を刺された。彼の著書には、私の文章が十二カ所にわたって引用されている。喜ぶべきか、悲しむべきか。[村上 1991 : 32-33]

一方、村上の論文からの引用ほど頻繁ではないものの、ステファンの著書には小牧が 1942 年に『地理学』、『現代』、『政界往来』誌に発表した論文が、それぞれ 1, 2, 1 本引用されている [小牧 1942a ; 同 1942b ; 同 1942c ; 同 1942d]。そのうち、「大東亜の地政学的考察」[小牧 1942d] 以外はいずれも、後に出版された小牧の著書『日本地政学』と『続日本地政学宣言』に収録された論文である。したがって、本来ならば、ステファンはわざわざそれらの原載雑誌名を書く必要はないはずである。にもかかわらず、ステファンがそ

れらを記載した理由は、やはり小牧がステファンに示唆したからであると推測される。

そのほかにステファンが参考文献として挙げている小牧の著作は、『日本地政学』、『地政学上より見たる大東亜』、『大東亜地政学新論』の3冊である。そのうち、『大東亜地政学新論』は、村上の上記の論文が含まれているため挙げているだけで、文章中に引用されているわけではない。

続いて、ステファンが小牧の雑誌論文や著書に依拠するのではなく、インタビューにより情報を得たと記している箇所を検討しよう。まずは、インタビューが村上・久武・ステファンの3人が会して神戸の甲南大学で行われた1979年8月17日と、村上・小牧・ステファンが会して京都の平安神宮付近で行われた1979年8月18日の2日間にわたったことを確認しておきたい⁵⁾。

では、1日目と2日目のインタビューで、ステファンは小牧と村上から何を聞き出したのだろうか。この検討には、誰から得た情報なのか、どの文献を参照したのかについて記された著書末尾の注(179-206頁)が参考になる。

ステファンが1日目に聞いた情報と記しているのは、村上が大学卒業後、太平洋とりわけハワイの地政学に著しい興味を覚えたということだけであった [Stephan1984 : 155]。それに対し、2日目はというと、第一に、戦中の地政学研究で作成・使用したノート、レポート、図書の類を、敗戦直後にGHQの手に渡らないように焼き捨てたこと [Stephan1984 : x-xi]、第二に、小牧が外部の者、とりわけ同じテーマを研究している者に情報を漏らさないように村上たちに注意していたこと [Stephan1984 : 149]、第三に、京大に近い吉田山の名をとってYoshida Research Centerと命名された、小牧を中心とする地政学研究グループ(総合地理研究会)があったこと [Stephan1984 : 154]、第四に、戦後の小牧の経歴 [Stephan1984 : 170] についてであった。

ステファンの著書に記されたインタビューにより得た情報は、以上の五点である。なお、これらはすべて村上から聞いた情報ということになっている。そのため、小牧がどのようなことをステファンに話したかはよく分からない。とはいえ、上述のように、2日目には小牧が同席していたことから、村上が話したとされる内容には小牧の意図も反映されていたとみてよいだろう。

8. おわりに—1980年の文章の意味—

以上、小牧が戦後行った研究の概観に続いて、1980年の文章で自らの地政学に対する信念を表明した背景を探ることを通じて、戦後の彼の地政学観を明らかにしようとしてきた。

まず、事実と認められることを整理すると、次のようになる。すなわち、小牧は1979年8月18日にステファンと面会した。小牧はその日に向けて、戦中の地政学の自著5冊

をかなり念入りに読み返した。ところが、それらの自著は①『日本地政学言言』(再版)を除くと、少なくともいったんは彼の手から離れていたものだった。また、小牧はステファンと面会した際、少なくとも自著や雑誌論文のいくつかについて示唆をし、それらの一部がステファンの著書の引用文献に挙げられている。以上の事実のほか、いくつかの推測が成り立つことも述べてきた。

次に、小牧がステファンから聞くに及んだアメリカの地政学の状況とは、いったいどのようなものだったのであろうかを考えてみたい。ステファンは、著書にホリウチの論文を2度引用していることから明白なように〔Stephan1984 : 154, 193〕⁶⁾、ホリウチの学位論文を念頭に置いており、その存在や内容を小牧に教えたと考えられる。そうでなければ、小牧が1980年に発表した文章「戦前、戦中、戦後」〔小牧1980〕に、アメリカの学位論文に関する記述が含まれることを説明できないからである。

では、結局のところ、戦後の小牧は、戦中の地政学に対してどのような考えを持っていたのだろうか。この点に関して、例えば岡田のように、小牧が戦後のいつかの時点で地政学の自著を読み返したというだけで、彼が戦中の地政学に対して戦後も確固たる信念を持っていたとの判断を下すのは、やや早計と言わざるを得ない。「小牧文庫」に収められた小牧の自著は、そこに記載された日付が物語るように、あくまでステファンのインタビューに向けて読み返したもののなのである。

さらに、読み返した自著の大半が、少なくともいったんは彼の手を離れていたものであることにも注意しなければなるまい。読み終えると「何年何月何日一読了 小牧実繁」と署名する習慣を持つ小牧が、読んだにもかかわらず、何も書き込まなかったとは考えにくい。したがって、読了の署名がないという事実は、戦中に地政学を研究したことにより、戦後いろいろな不都合を味わうことになった小牧が、いったんは地政学から離れたことを暗示するものなのかもしれない。もちろん、そうではなく、戦後も「日本地政学」に対して信念を持ち続けていたものの、歴史地理学・民俗学的研究や大学行政の仕事に忙しく、晩年までは地政学について振り返ったり、大っぴらに語ろうとはしなかったという可能性も十分に考えられる。

いずれにせよ、1977年ごろにステファンが村上に連絡を取り、その情報が小牧にも伝わることにより、小牧は戦中の地政学に再び向き合う機会を得た。そして、1979年8月のインタビューに向けて自著を読み返し、インタビューの場でステファンに戦中の著書や雑誌論文について示唆すると共に、以前から情報を得ていたであろうアメリカにおける「日本地政学」の好評価をあらためて耳にし、1980年の文章にそれを書き付けるに至ったと考えられるのである。

このように、1980年の文章「戦前、戦中、戦後」は、戦後の小牧が戦中の地政学に対し

てどのような考えを持っていたのかを知る上で、重要な手がかりを与えてくれるものであり、わずか2頁ではあるが、非常に価値のある資料と言えるだろう。

公刊された資料からは、戦後の小牧の地政学観をこれ以上探るのは恐らく困難をきわめると予想されるが、幸いにも京都大学大学図書館には小牧が残した書簡や日記などが残されており、現在整理が行われている。こうした非公刊資料を用いることにより、今後さらにこの問題を探究する余地は残されているであろう。

付記

本稿は2004年1月に神戸大学文学部へ提出した卒業論文「戦後地理学と地政学」の後半部分に、大幅な加筆修正を加えたものである。2003年夏に兵庫地理学協会ですべてお目にかかってから2006年までの間に、対面並びにお手紙により「日本地政学」について多くのことをご教示下さった故久武哲也先生に感謝の意を表したい。

注

- 1) 沢田四郎作 (1889-1971 年)。小児科医の傍ら近畿地方の民俗調査に従事し、近畿民俗学会会長を務めた。
- 2) *Deseret News* の *Obituaries* の記事「Russel Horiuchi」によると、ホリウチはハワイ生まれの日系人で、太平洋戦争開戦と共にアメリカ陸軍情報部 (U.S. Army Military Intelligence Service) に勤務し、日本降伏からわずか 14 日後に東京にやって来た。しばらく日本に滞在した後アメリカに戻った彼は、カリフォルニア大学バークレー校で政治学の修士号を取得し、ユタ州のブリガム・ヤング大学 (Brigham Young University) などで教鞭を執った。また、1970-1973 年と 1988-1991 年には日本に滞在していたようである。
<http://www.legacy.com/obituaries/deseretnews/obituary.aspx?n=russell-horiuchi&pid=147921168&fhid=4519> (最終閲覧日 2018 年 11 月 8 日)
- 3) ステファンは、ハーバード大学で東アジア研究の学士号・修士号を取得した後、ロンドン大学の東洋アフリカ研究学院 (University of London's School of Oriental and African Studies) で日本史の博士号を取得した。千島列島、サハリン、極東ロシアなどに関する著書を出版している。
- 4) *Hawaii Under the Rising Sun* には邦訳 (竹林卓訳『日本国ハワイー知られざる「真珠湾」裏面史一』恒文社, 1984) があるが、原著の注や参考文献をすべて省略しているため、本稿では原著を用いた。
- 5) 筆者が久武から聞いた話によると、久武自身は 2 日目のインタビューには同席しなかったとのことである。
- 6) 注から判断する限り、ステファンはホリウチの論文から、日本地政学協会と『地政学』第 1 巻第 2 号に掲載された立命館大学教授の田中直吉 (1907-1996 年) による論文「東亜聯盟の地政学的構造」に関する記述を参照している。

文献

- 浅井辰郎編（1992）：「野間三郎先生追悼文集」理論地理学ノート，8，119-153.
- 浅井得一（1978a）：「バーモ暗殺事件についての証言（上）」政治経済史学，144，1-14.
- 浅井得一（1978b）：「バーモ暗殺事件についての証言（下）」政治経済史学，145，1-18.
- 浅井得一（1978c）：「バーモ暗殺事件についての証言（補遺）」政治経済史学，149，11-22.
- 岩田孝三（1942）：『地政学（朝日新講座 38）』朝日新聞社.
- 小林茂・鳴海邦匡・波江彰彦編（2010）：『日本地政学の組織と活動－総合地理研究会と皇戦会－』
大阪大学文学研究科人文地理学教室.
- 小牧実繁（1935）：「巴里学事暦（一）」地理学，3（4），203-208.
- 小牧実繁（1936a）：「巴里学事暦（二）」地理学，4（8），229-233.
- 小牧実繁（1936b）：「巴里学事暦（三）」地理学，4（10），124-132.
- 小牧実繁（1936c）：「巴里学事暦（四）」地理学，4（12），128-132.
- 小牧実繁（1942a）：「太平洋の地政学」現代，23（1），98-105.
- 小牧実繁（1942b）：「大東亜の地政学」政界往来，13（3），24-29.
- 小牧実繁（1942c）：「大東亜の地政学的概観」地理学，10（4），1-8.
- 小牧実繁（1942d）：「大東亜建設の地政学的考察」現代23（10），54-63.
- 小牧実繁（1951）：「牧野聞書」近畿民俗，6，2-4.
- 小牧実繁（1953）：「菅浦見聞記」近畿民俗，12，35-36.
- 小牧実繁（1954）：「西近江路の将来」滋賀大学学芸学部紀要，3，21-26.
- 小牧実繁（1955）：「愛知川上流地域に於ける交通路の変遷と回春」滋賀大学学芸学部紀要，4，3-13.
- 小牧実繁（1956a）：「大君ヶ畑聞書」近畿民俗，18，500-504.
- 小牧実繁（1956b）：「野の開発－蒲生野の場合－」（田中秀作教授古稀祝賀会編『田中秀作教授古稀記念地理学論文集』柳原書店）176-191.
- 小牧実繁（1957）：「朽木谷の歴史地理学的概観」滋賀大学学芸学部紀要，6，65-71.
- 小牧実繁（1975）：「三ぼうの出会い」菅沼晃次郎『近江の民俗』民俗文化研究会，巻頭.
- 小牧実繁（1976a）：「久米島民俗断片」（池田弥三郎『日本民俗誌大系 第10巻 未刊資料I』角川書店）26-30.
- 小牧実繁（1976b）：「近江野洲郡の民俗」（池田弥三郎『日本民俗誌大系 第11巻 未刊資料II』角川書店）95-98.
- 小牧実繁（1984）：『近江国見聞録－伝承を訪ねて五十年－』滋賀県民俗学会.
- 小牧実繁・川合重太郎・木村憲治（1960）：「近江盆地周縁山村の研究－（1）江越国境越交通路の変遷と交通集落としての中河内－」滋賀大学学芸学部紀要，10，33-48.
- 小牧実繁・川合重太郎・宮畑巳年生（1958）：「杉野谷調査覚書」滋賀大学学芸学部紀要，8，1-14.
- 小牧実繁・川合重太郎・宮畑巳年生・小林博（1956）：「鈴鹿山脈西縁山村の研究－脇ヶ畑村の場合－」滋賀大学学芸学部紀要，5，73-88.
- 小牧実繁・宮畑巳年生（1957）：「近江盆地周縁山村の研究－丹生谷の場合－」滋賀大学学芸学部紀要，7，9-21.
- 小牧実繁・宮畑巳年生（1962）：「信楽陶業の生産構造」滋賀大学学芸学部紀要，12，29-43.
- 小牧実繁先生古稀記念事業委員会編（1968）：『人文地理学の諸問題－小牧実繁先生古稀記念論文集－』大明堂.
- 柴田陽一（2005）：「小牧実繁の著作目録と著述活動の傾向」歴史地理学，47（2），42-63.
- 柴田陽一（2016）：『帝国日本と地政学－アジア・太平洋戦争期における地理学者の思想と実践－』

- 清文堂出版.
- 竹内啓一 (1986) : 「地理学者の夢と現実」 一橋論叢, 95 (3), 1-16.
- 竹内啓一・正井泰夫編 (1986) : 『地理学を学ぶ』 古今書院.
- 久武哲也 (1999) : 「ハワイは小さな満州国ー日本地政学の系譜ー」 現代思想, 27 (13), 196-204.
- 正井泰夫・竹内啓一編 (1999) : 『続・地理学を学ぶ』 古今書院.
- 村上次男 (1943) : 「ハワイの姿」 (小牧実繁編『大東亜地政学新論』 星野書店) 186-211.
- 村上次男 (1991) : 『八十歳の回想』 私家版.
- 村上次男 (1993) : 『回想は続く』 私家版.
- 無署名 (1954) : 「地理学関係講義題目一覧」 人文地理, 6 (2), 70-78.
- 無署名 (1955) : 「地理学関係講義題目一覧」 人文地理, 7 (3), 66-78.
- 無署名 (1959) : 「地理学関係講義題目一覧 (昭和 34 年度)」 人文地理, 11 (5), 80-93.
- Fifield, R. H. and Percy, G. E. (1944): *Geopolitics in Principle and Practice*. Ginn.
- Menefee, S. C. (1942): What Tokyo tells the world. *The Christian Science Monitor*, 35(21), p. 5 & p. 12.
- Menefee, S. C. (1943): Japan's global conceit. *Asia and the Americas*, 43(6), pp. 330-332.
- Horiuchi, R. N. (1975): *Chiseigaku: Japanese Geopolitics*. Ph. D. dissertation, University of Washington.
- Stephan, J. J. (1984): *Hawaii Under the Rising Sun: Japan's Plans for Conquest after Pearl Harbor*. Hawaii University Press. [竹林卓訳 (1984) : 『日本国ハワイー知られざる「真珠湾」裏面史ー』 恒文社.]
- Takeuchi, K. (1994): The Japanese imperial tradition, Western imperialism and modern Japanese geography. (Godlewska, A. and Smith, N. eds., *Geography and Empire*, Blackwell), pp.188-206.
- Takeuchi, K. (2001): Japanese geopolitics in the 1930s and 1940s. (Dodds, K. and Atkinson, D. eds., *Geopolitical Traditions: A Century of Geopolitical Thought*, Routledge), pp. 72-92.